



[TOP](#) [世話人](#) [会則](#) [歩み](#) [日常活動](#) [犠牲者名簿作り](#) [100人の証言](#) [他の証言](#) [資料](#) [リンク集](#)

## 千葉空襲で弟が死に、先生と級友も死んだ

新宮義子

私（旧姓管野義子）、当時10歳で、千葉市本町小学校4年生であった。千葉市亀井町に住んでいた。家族は両親、子ども8人の10人家族であった。私は次女であった。父は京成電鉄の事業部で働いていた。当時は、京成工業高校の校長をしていた。父（氏名管野博夫、年齢42歳）は出征していなかった。母の兄が丁度、父と同じ年であり、終戦後にわかったことであるが、伯父は九州方面に派遣されていた。このような状況なので、父も頭を坊主にして、いつ自分の身に何が起きるかを待っていたが、結局出征しなかった。家族は、空襲に備えて千葉市加曾利に疎開することに決めていた。

1945年7月6日夜、一旦床に就いた記憶があり、警報が鳴り出し起こされた。家族で空襲に備えていたが、ついに空襲になり近所に焼夷弾が落ち、家の垣根が焼けて来た。父や兄（中学校2年生）、姉（高等女学校3年生で日立航空機に学徒動員されていた）の3人で消火を開始したが、あまりの敵機の多さであった。両親は、いつもと少し様子が違うと思ったようで、小さい子供が3、4人いるので、一番下の妹（1歳）を母（こま）がおんぶして、二番目の妹と弟（6歳で、その年の4月に本町小学校に入学したばかりであった）、私と妹（同小学校2年生）、弟と6人で加曾利に一時避難をするために家から出た。都川の手前に来た時、また、焼夷弾が落ちてきた。この時は人が大勢いたのでパニックになったが、私たちは手をつないで歩きだしたところ、空からヒュルヒュル、今まで耳にしなかった音がした。さらに沢山のヒュルヒュル音の中、右側の土手（畑の様だった）にたどり着いたが、避難して来た人も多くいた。

その時、大きな爆発音がした途端、弟が一瞬身体を起こしたので、「お母さん、稔一が死んでしまう」と声をかけた。爆弾の音が止んでからも、母も暫く動けなかった。後で聞いた話では、この爆弾は千葉大学を狙ったものと言われた。母が妹をおぶった姿で弟を抱きあげて、近くの千葉大学の医師宿舎に駆けこんで「どなたか先生はいらっしゃいませんか」と何度も大声で叫んだところ、医師らしき2人の男性が2階から降りて来て診断した。「即死です」「夜が明けるまでその玄関に寝かせてあげなさい」と言われたので、もう加曾利に行く事はなかった。

都川の土手には、沢山の方がたが亡くなり、川の中でも亡くなったりした。家は無事であった。父が駆け付けて弟の身体を見た。服はどこも破れていなかったが、服を脱がせると身体に7カ所の傷があった。奇しくも、7月7日に数え年7歳の弟管野稔一（6歳）が身体に7カ所負傷して死んでいった。父の涙はこの時初めて見た。

前の日、母に「『ご飯が食べたいよう』とせがんでいた弟は不憫でならない」と母は泣いた。母はお米を大黒柱の父の為にとっていたが、少し食べさせてやればよかったと悲しんだ。また妹も弟の傍からこちらに来なければ、妹も死んでいたかもしれない。その時に見た爆弾爆発の跡は大きなすり鉢状になっていた。

翌年から弟の命日が7月7日七夕なので笹で短冊を作って亡くなった場所へ持って行って供養していた。私がこの世にある限り7月7日七夕を忘れない。母が口癖のように話していたことは「稔一はキャラメルもチョコレートも知らないで、可哀想だった」と。7日の命には、この2包だけは必ず仏様に備えて供養している。千葉県が主催する戦災犠牲者慰霊祭は欠かさず出席してきた。お寺の過去帳には記載されているが、まだ墓石には刻銘されていないでいる。

なお、この空襲で、受け持ちの森田〇〇女先生（千葉市吾妻町）と同級生の本田〇〇さん（千葉市院内町）、刈込〇〇さん（千葉市市場町）も亡くなったと学校で聞かされた。2012/2/28

